

バラの系譜

野村 和子(バラ文化研究所副理事長)

すべての園芸植物は自然界にあるままの野生種にその原点がある。

ヒトが他の動物が持たない特権、それは「美しいと感じる心」を持っていることであるといわれる。4万6千年、あるいは6万年前とも考えられているシャニダール遺跡の発掘からもわかるように原人ネアンデルタール人の時代から人は死者に花を手向けていた。それは山野に咲く花を美しく感じ、花の美しさは死者の霊を慰めると考えられたからであろう。

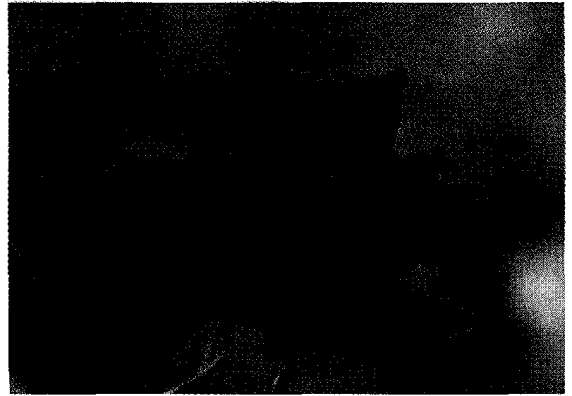
自然界から花を採取するにあたって、より美しい花を選んだことであろう。やがて美しい花を選び、掘り取って持ち帰り、身近に植えて利用し楽しむに至ったことと思われる。この時すでに「選ぶ」という改良がなされているのである。すべての植物が場所を変えて育つとはいえないが、適応性の高い種類は人が選び、栽培をすることで本来の姿・色・大きさを発展させていく。交配という技術をもって改良されるのは長い歴史からみるとごく近年のことになる。

多くの野生植物が改良されてきた中で、その筆頭に位置するもののひとつにバラがあるといえるだろう。

なぜなら、バラの原点は花弁数5枚の大きくはない花だからである。たった5枚の花弁の花からどうして今みるように30枚も40枚もの花弁数をもつ大輪の、そして青以外はないといわれるほど豊富で鮮やかな花色を持つ園芸植物に変身していったのだろうか。



ノイバラ



熱 情

世界の野生種

ひと口にバラの野生種といっても地球上にはおよそ150種くらいが存在している。南半球に自生はみられず、北半球のみになる。ヨーロッパにも北アメリカにも北アフリカにも野生種はあるが、もっとも多くみられるのはアジアである。日本にも15種類ばかりが自生している。

これらすべてが現在のバラへの改良に係わったわけではなく、これらのうちでほんの10数種が原点となつたとされている。

ガリカローズとガリカ節の原種

西アジアから南ヨーロッパにかけて自生するバラにロサ・ガリカ (*Rosa gallica*) がある。別名のロサ・ルブラ (*Rosa rubra* = *rubra*は赤の意) にみるように多くは紅色の花のものが多く、ときには淡いピンクの種類もある。英国のキュー植物園には淡紅色のロサ・ガリカが植栽、保存されている。このガリカが西アジアのフェニキア (今のレバノンのあたり) 一帯に自生するロサ・フェニキア (*Rosa phoenicia*) と自然交雑されてできたのがロサ・ダマスケナ (*Rosa damascena*) である。フェニキアは日本のノイバラのような形のバラであるがよい香りをもっている。これがやはり香りのいいガリカと自然交雑されたことで、現在でも香料採取に利用され、ダマスク香と呼ばれるバラを代表する香りをもつバラ、ダマスケナが出現するのである。

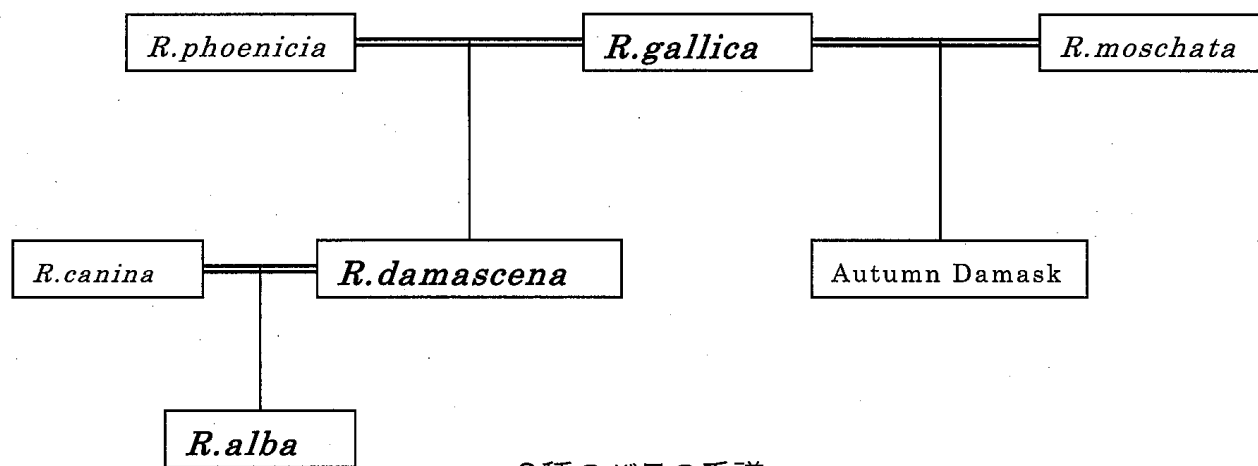
このダマスケナはすでに5枚の花弁ではなくて20枚くらいの花弁を持って

いる。バラはおしべがたくさんあり、おしべは花卉に変化しやすい性質があるため、八重咲きになりやすい、という特性をもっているのである。

このダマスケナにヨーロッパではもっとも普遍的なロサ・カニーナ (*Rosa canina*) が自然交雑されてできたのが、ロサ・アルバ (*Rosa alba*) である。以上の3種がおそらくギリシア・ローマ時代から多用されたバラであろうと考えられている。

この3種に加えて、16世紀頃に出現したと考えられているロサ・ケンティフォリア (*Rosa centifolia*) を加えた4種が中世から近世にいたるまでヨーロッパで盛んに栽培されており、品種数が爆発的に多くなるのは19世紀に入ってからのこととなる。これは18世紀末にアルフォンス・カールという人が「ルイ14世の頃まではバラは4種しか知られていなかった。」と言っていることから分かる。

これら4種と、四季咲き性のあるチャイナローズが基本となり、相互交雑により多くの系統が出現するにいたるが、同時にそれぞれもひとつの系統の基本種となっていくのである。



3種のバラの系譜

以下は系譜の3種にケンティフォリアを加えた4種が基本となる各系統。

ガリカ系 (Gallica Rose)

ロサ・ガリカ (*Rosa gallica*) の変種で、花卉数は15~20枚の半八重咲きの華やかさがあるロサ・ガリカ・オフィキナリス (*Rosa gallica officinalis*) を中心と

して発展した系統で、オフィキナリスの持つ紅色系の花色や大輪性を現代に伝えている。代表的なものにはトスカニー(Tuscany) やカーディナル・ド・リシュリユー(Cardinal de Richelieu), シャルル・ド・ミル(Charles de Mills)などがある。



ガリカ・オフィキナリス

ダマスク系 (Damask Rose)

ロサ・ダマスケナ (*Rosa damascena*) を基本種とした系統で、前述したようにガリカにフェニキアが交雑されたものは春のみの一季咲きでサマーダマスクと呼ぶ。一方ガリカにロサ・モスカータ (*Rosa moschata*) が交雑されたものは、花は区別がつかないほど似ているが秋に少しの花が咲くためオータムダマスクと呼ばれる。(前頁の図参照)



ロサ・ダマスケナ

この系統はダマスクローズのピンクの色を受け継ぎ、ピンク系の花色のものが多く、中輪、なにより香りのいいのが特徴で、後世のバラにダマスク香を引き継ぐ。ヨーク・アンド・ランカスター(York and Lancaster)、セルシアナ(Celsiana)、マダム・アルデイ(Mme. Hardy)など。

アルバ系 (Alba Rose)

この系統の基本種、ロサ・アルバ (*Rosa alba*) が白の花色で、基本的には白色の花が多いが、ピンクの花色の種類もある。新芽や茎、とげにも赤みのないものが多い。さわやかな香りをもつ。白花にはマキシマ(Maxima)、マダム・プランティエ(Mme.Plantier)、マダム・ルグラ・ド・サンジェルマン(Mme.Legras de St.Germain)など、ピンクの花色にはセレスティアル(Celestial)、フェリシテ・パルマンティエ(Félicité Parmentier)などが



アルバ・セミブレナ

ある。

ケンティフォリア系(CentifoliaRose)

ケンティフォリアのケンティ(cent)は100を意味し、キャベジローズ(Cabbage Rose)の別名でもわかるようにたくさんの花弁をもつものが多い系統である。

香り、華やかさ、大輪性などを現代バラに伝えている。中世から近世にかけて画家が好んで描いたため「画家のバラ」といわれた。シャポー・ド・ナポレオン(Chapeau de Napoléon)、ファンタン・ラトゥール(Fantin-Latour)、ジュノー(Juno)などがある。

モス系(Moss Rose)

萼から萼筒、小花柄にかけて腺毛が密集し、それが苔のように見えることからモス(苔)ローズといわれる。ケンティフォリア系が起源のものと、ダマスク系が起源のものがある。ケンティフォリア・ムスコサ(Centifolia Muscosa)、アンリ・マルタン(Henry Martin)、ムスー・ドウ・ジャポン(Mousseux du Japon)など。



アンリ・マルタン

チャイナ系(China Rose)

18世紀末までは上記の4種のバラとその変種くらいしかなかったヨーロッパのバラの世界に画期的な進展をもたらしたのが中国のバラであった。中国には多くのバラの野生種があるが、その中にロサ・キネンシス(*Rosa chinensis*)が



ロサ・キネンシス・スポンタネア

あり、長い時を経てこの種が四季咲き性を持つにいたる。その一群をチャイナローズと呼び、それらのうちの4種が18世紀の終わりから19世紀のはじめにかけてヨーロッパに紹介される。チャイナローズの四季咲き性の導入はヨーロッパのバラ界には画期的なことであり、さらにこの頃に始まっ

た人工交配の技術が拍車をかけて19世紀は新しい品種が爆発的な勢いで増えていく。

最初にヨーロッパに紹介された中国の4種のバラは以下の通りである。

スレイターズ・クリムソン・チャイナ (Slater's Crimson China) [ロサ・キネンシス・センペルフローレンス (*Rosa chinensis senperflorens*)]

パーソンズ・ピンク・チャイナ Parsons' Pink China [オールドブラッシュ (Old Blush)]

ヒュームズ・ブラッシュ・ティーセンテッド・チャイナ (Hume's Blush Tea-scented China)

パークス・イエロー・ティーセンテッド・チャイナ (Park's Yellow Tea-scented China)

ポートランド系 (Portland Rose)

チャイナローズの四季咲き性がヨーロッパに導入されて交配に関わった最初の系統であると考えられている。前記の系統のうちでオータムダマスクにスレイターズ・クリムソン・チャイナが交雑されて成立したと考えられている系統で、四季咲き性のあるものとなないものがある。完全に木立ち性になるコンテ・ド・シャンボール (Comte de Chambord) やジャック・カルチエ (Jacques Cartier) は四季咲き性があり、枝が伸びるポートランドローズ (Portland Rose)、ローズ・ド・レッシュ (Rose de Rescht) などには四季咲き性がない。枝の伸び方と四季咲き性には密接な関係がある。



コンテ・ド・シャンボール

ブルボン系 (Bourbon Rose)

ポートランド系同様オータムダマスクにチャイナローズが交雑されたものと考えられているが、このチャイナローズはおそらくオールドブラッシュであろうとされている。今のレ・ユニ



マダム・イサーク・ペレール

オン島で発見されたもので、当時ブルボン島と呼ばれていたため、それが系統名となった。

花卉数が多く、形のいい花がたくさんつき、花色も豊富で愛好家の多い系統である。少しだが四季咲き性もある。ラ・レーヌ・ビクトリア (La Reine Victoria)、ブル・ド・ネージュ (Boule de Neige)、スーヴニール・ド・ラ・マルメゾン (Souv. de la Malmaison) など美しい花が多い。

ハイブリッドパーペチュアル系 (Hybrid Perpetual Rose)

オールドローズの中ではもっともたくさんの種類がある系統である。上記の系統が複雑に交配されて成立したもので、パーペチュアルとは繰り返すことを意味し、かなりの四季咲き性があることで名づけられた。花の大きさ、葉の色やつやなど現代バラにかなり近いことがうかがわれるが、四季咲き性については秋に少し咲く程度である。バラをオールドローズとモダンローズに分けるときの(後述)に、この系統はモダンローズに入れるという考え方をした時代がある。



バロン・ジロー・ド・ラン

ポール・ネイロン (Paul Neyron)、フェルディナンド・ピシャール (Ferdinand Pichard)、バロン・ジロー・ド・ラン (Baron Girod de l'Ain) など。

ティー系 (Tea Rose)

ロサ・キネンシスにロサ・ギガンテア (*Rosa gigantea*) が自然交雑されて出来たものと考えられている。多くは木立ち性で四季咲き性ははっきりとあり、弁先が尖る、いわゆる剣弁咲きになるものが多い。ギガンテアから引き継いだティーつまり紅茶の香りがする。このティー系とハイブリッドパーペチュアル系とが交配されてモダンローズの第1号ハイブリッドティー系のラ・フランス (La France) が登場する。



レディ・ヒルドン

モダンローズの多くはこのティー系のギガンテアの香りを引き継いでいる。サフラノ (Safrano)、グロワール・ド・ディジョン (Gloire de Dijon)、レディ・ヒリンドン (Lady Hillingdon) など。

ノワゼット系 (Noisette Rose)

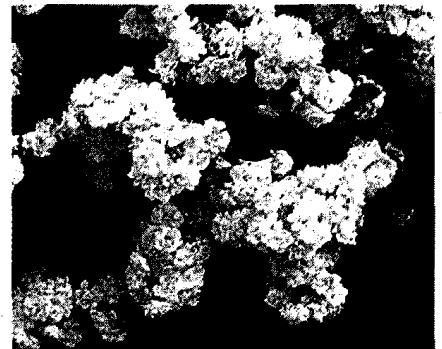
チャイナ系のオールドブラッシュにロサ・モスカータが交配されて出来た系統で、モスカータが6月に入り咲き出すのを受けてこの系統も遅咲だが夏から秋まで咲くものが多い。鈍い黄色系の花色もある。甘くはないが、独特のすっきりした香りをもつ。ブラッシュ・ノワゼット (Blush Noisette)、ジョーヌ・デスプレ (Jaune Desprez) マダム・アルフレッド・カリエール (Mme. Alfred Carrière) など。



ブラッシュ・ノワゼット

ポリアンサ系 (Polyantha Rose)

日本のノイバラ (*Rosa multiflora*) にロサ・キネンシスが交配されて小輪だが花数の多いポリ (たくさんの) アンサ (花) 系となった。はっきりとした四季咲き性があり、またノイバラの強健さを受け継いでいる。ミニオネット (Mignonette)、パケレット (Pâquerette)、セシル・ブルンネ (Cecil Brunner) など。



ミニオネット

ランブラー系 (Rambler Rose)

日本の野生種テリハノイバラ (*Rosa luciae*-旧名 *Rosa wichuraiana*) の伸びる性質を利用して改良されたもので、これがさらに発展してモダンローズのつるバラとなる。フランソワズ・ジュランビル (François Juranville)、キュー・ランブ



フランソワズ・ジュランビル

ラー(Kew Rambler)など。

以上、ガリカ系からここまではオールドローズの分野に入る。

他にも、ブルソール系(ロサ・ペンドゥリナ(*Rosa pendulina*) × ロサ・キネンシス)、エアシャー系(ロサ・アルウエンシス(*Rosa arvensis*)の改良種)、ミセレイニアス(その他)などもあるが、ごく限られたところでしか栽培はされていないので省略する。

黄色バラの系譜

現代のバラに黄色があるのは当たり前のことになっているが、今までみてきた範囲では黄色のバラはなくて、白から紅色までの色のグラデーションになっている。

バラに黄色の野生種がないわけではないが、その花色を交配し改良していくことに困難があったのである。多くの花木は春、黄色の花から始まるように、バラもまた黄色の野生種が最初に咲き始める。

ロサ・フゴニス(*Rosa hugonis*)、ロサ・プリムラ(*Rosa primula*)、ロサ・クサンティナ(*Rosa xanthina*)、ロサ・エカエ(*Rosa ecae*)などである。これらはすべて中国原産の種である。

他に西アジアのあたりにロサ・フォエティダ(*Rosa foetida*)という鮮やかな黄色の野生種があり、これの変種で八重咲きのロサ・フォエティダ・ペルシアナ(*Rosa foetida persiana*)がある。フランスのペルネ・ドゥシエ(Perne Duché)はこのペルシアナとハイブリッドパーペチュアルとを交配することにより、長い年月をかけた末に大輪八重咲きの橙黄色のバラ、ソレイユ・ドール(Soleil d'Or)を作り出した。これがさらにハイブリッドティーローズと交配されることで現代バラに黄の花色が導入されたのである。このあと、ソレイユ・ドールが交配に関わり、またペルネが作出した品種については、ペルネ・ドゥシエの名をとり、ペルネシアナ系と呼ばれ、昭和の初期まで続く。

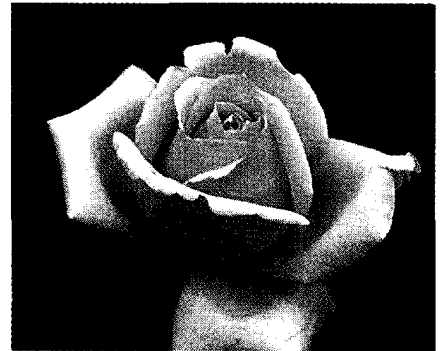


ソレイユ・ドール

ノワゼット系やティー系にみられる淡い黄色の花色はパークスイエロウ・ティーセンテッド・チャイナの血を引き、鮮やかな黄色ではない。

ハイブリッドティー系 (Hybrid Tea Rose)

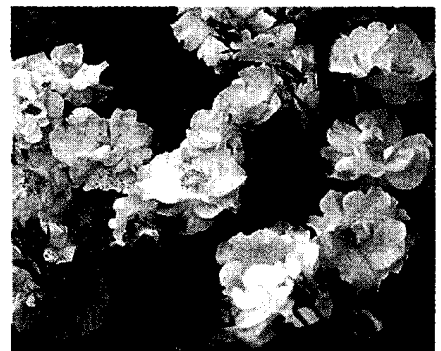
前述したように、ティ系とハイブリッドパーペチュアル系との交配により成立したモダンローズの第1号の系統である。普通1茎に1花をつけ、四季咲き大輪種であって、モダンローズの主流を占める。樹高1~1.8m。花径は10~15cm。花色は豊富で剣弁咲きになるものが多い。ピース(Peace)、ブルームーン(Blue Moon)、パパメイアン(Papa Meiland)など。



ブルー・ムーン

フロリバンダ系 (Floribunda Rose)

ハイブリッドティー系にポリアンサ系が交配されてできた系統。中輪、房咲き種である。樹高は0.7m~1.2m。花は中輪ながら、1茎にたくさんの花をつける。アイスバーグ (Iceberg)、マチルダ(Matilda)、サラバンド(Saraband)など。



花霞

ミニアチュア系 (Miniature Rose)

ポリアンサ系にロサ・キネンシスの矮性種が交配されてできたもの。樹高20~60cmくらい。小輪ながらたくさんの花をつける。テディ・ベア(Teddy Bear)、オーバーナイト・センセーション(Overnight Sensation)など。



プリリアント・メイアンディナ

クライミング系 (Climbing Rose)

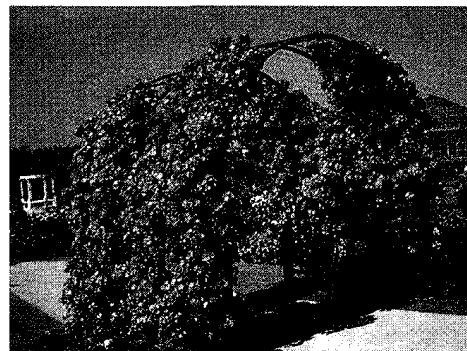
いわゆるつるバラである。つるバラにも前述のランブラー系から改良されてきたものとその他にハイブリッドティー系、フロリバンダ系などの木

立ち性の品種から突然変異で出現したつる性の品種とがある。これら突然変異で出た品種は元となった名前に「つる」を冠する。

ピース(木立ち性) → つるピース

アイスバーグ(木立ち性)
→ つるアイスバーグ

チャールストン(木立ち性)
→ つるチャールストンなどである。



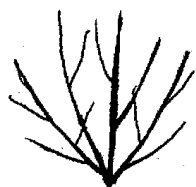
アンジェラ

シュラブ系 (Shrub Rose)

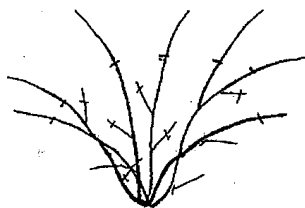
シュラブは主に3つのグループに分かれる。

- 1 原種交雑種
- 2 アンティークタイプ
- 3 ランドスケープローズ

本来、バラにおけるシュラブという言葉は半つる性になる樹形をいう。



木立ち性(ブッシュ)



半つる性(シュラブ)



つる性

野生種の多くはシュラブタイプであり、オールドローズの多くもそうである。上記1.2.3.の3つのグループの中にはつる性のものもあれば、木立ち性のももあるが、多くは半つる性であり、総合してシュラブと称する。

1 原種交雑種 (Hybrid Species)

野生種に各種のバラを交配して作出したもので、元の野生種の名前をとって分類している。

ハイブリッドマルチフロラ Hybrid Multiflora HMult ノイバラの交配種
 ハイブリッドルゴサ Hybrid Rugosa HRg ハマナシの交配種
 ハイブリッドムスク Hybrid Moschata HMsk ロサ・モスカータの交配種
 ハイブリッドカニーナ Hybrid Canina HCan ロサ・カニーナの交配種
 ハイブリッドスピノシシマ Hybrid Spinosissima
 HSp ロサ・スピノシシマの交配種

バラの改良の系譜には乗ってこなくても、野生種を直接の親にしている場合が多いため、親の影響を受けてそれぞれが独自のジャンルを形成し、素朴な印象が残されている。愛好家の多いバレリーナ (Ballerina) はハイブリッドムスクである。



ジョーヌ・デスプレ(HMsk)

2 アンティークタイプ

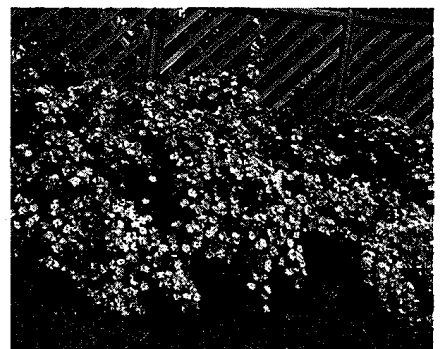
イングリッシュローズに代表されるグループである。イングリッシュローズはオールドローズの持つ花形、香りを生かして、それに四季咲き性を持たせるためにモダンローズを交配してできた比較的新しいジャンルである。英国のオースティンが先鞭をつけ、イングリッシュローズと名づけたが、現在は多くの育種家が同様のアンティークタイプのバラを作出している。エグランタイン (Eglantine)、ヘリテージ (Heritage)、ヨハンシュトラウス (Johann Strauss) など。



キャサリン モーレイ

3 ランドスケープローズ

修景バラともいい、公園や道路ののり面などに利用すべく、手入れをあまり必要としないですむよう開発されたグループで一株でも小山のように面積を占めることが多い。ハイウェイローズ、ロージーカーペット、ラベンダードリー



花見川

ムなど。

オールドローズとモダンローズの線引き

本解説のガリカ系からランブラーまで(正確にはミセレイニアスまで)をオールドローズとする考え方が現在では一般的である。かつては人為的に交配されたものをモダンローズとする考え方、ハイブリッドティーローズの親となったハイブリッドパーペチュアルとティーローズからをモダンローズとする考え方などいろいろあったが、現在はハイブリッドティー以降の系統群をモダンローズとする場合が多い。

また、オールドローズでは成立起源の種類別に系統分けをしているのに対して、モダンローズでは樹形別に系統分けをしているのが特長である。

これからさらに交配が進むと、オールドとモダンの線引きが困難になることが考えられる。何故なら例えばガリカ系同士を交配すれば、そのバラの系統名は当然ガリカ系であるが、その交配を2007年に行ったとしてもガリカ系であることから最新の交配種でありながらオールドローズと呼ぶことになってしまうことがおきるからである。今後はむしろ系統名でのみ表現したほうが適切といえるかもしれない。

最後に上記を一覧表にしたものを付記する。

